

## 吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）

### 1 調査の経過・概要

遺跡保存地区は吉田構内の南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置し、約2000m<sup>2</sup>の指定地内に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡21棟が現地保存されている。調査の概要を記す前に調査の経過を若干述べることにする。本学統合移転に伴う諸工事が進められていた昭和41年、遺跡保存地区の東に隣接する第一学生食堂の新営工事中に弥生時代中期の土器が出土した。サッカー場、ラグビー場等のグラウンドの造成範囲が明らかとなった昭和42年1月、大学からの要請を受けて当時、教育学部で教鞭をとっていた小野忠熙氏を中心として組織された吉田遺跡調査団は、埋蔵文化財の有無・分布範囲を確認するために当該地域一帯の試掘調査を実施した。その結果、一帯には弥生時代から古墳時代を主体とした集落跡が埋存していることが判明した。移転計画全体の都合上、グラウンド部分は遺構面までおよぶ削平が不可避であったため、事前に発掘調査を行うこととなった。調査の結果、サッカー場の一部に予定されていた地域（現在の遺跡保存地区）から弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居跡が多数検出された<sup>1)</sup>。各竪穴住居跡は住居および集落の时期的な変遷過程が一定地域内で把握できる、良好な分布状況を示していることから「遺跡保存地区」として現地保存されるに至った。しかし、吉田遺跡調査団はその後、統合移転に伴う調査に忙殺され、遺跡保存地区全域の発掘調査は容易に実施できない状態であった。

昭和56年、遺跡保存地区の北側で実施した教育学部校舎増築に伴う発掘調査で、遺跡保存地区と一連の集落を構成する竪穴住居跡が検出された<sup>2)</sup>。これを契機に、遺跡保存地区の重要性が再認識されるとともに、吉田構内における弥生時代以降の集落像を明らかにするための不可欠なモデルとなること、また、将来的に環境

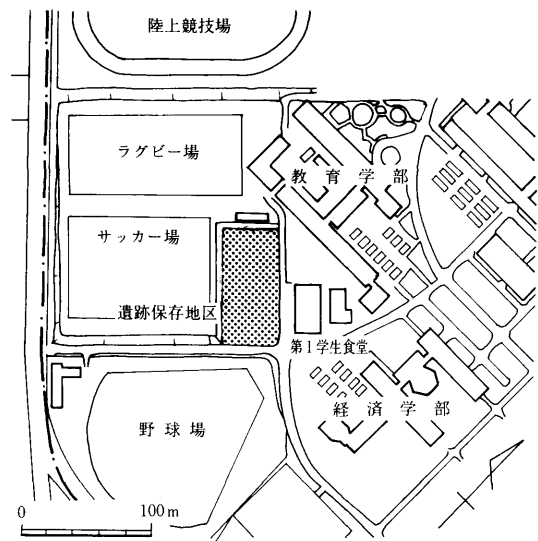


Fig. 68 調査区位置図

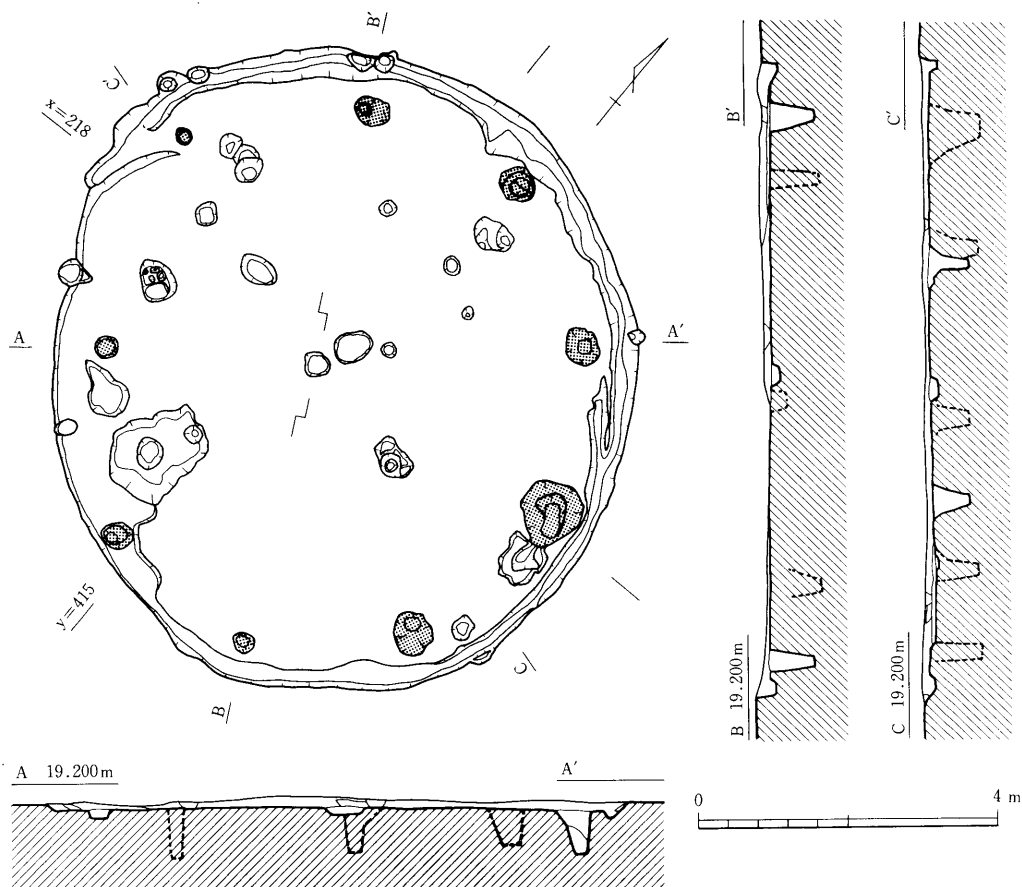


Fig. 69 第9号竪穴住居跡実測図

整備を進める上からも発掘調査による全域の個別具体的な資料の収集が急務であることが痛感された。以上の経過を踏まえて、昭和57年度以降、3ヶ年にわたり発掘調査を実施することとなった。しかし、構内の施設整備等に伴う調査が優先されたため、実際の調査は昭和57・59・60・61年度の4次にわたって実施することになった。

検出した遺構には、弥生時代中期前半から古墳時代中期の竪穴住居跡21棟、弥生時代中期前半から古墳時代前期の土壇50基、弥生時代中期中頃から古墳時代前期の溝14条、古墳時代後期から奈良時代の河川跡および柱穴多数がある<sup>3)</sup>。以下では、特徴的な遺構・遺物について個別的に述べることにする。

## 2 遺構

### (1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は弥生時代中期前半から古墳時代中期の21棟を検出した。壁溝をとどめるに

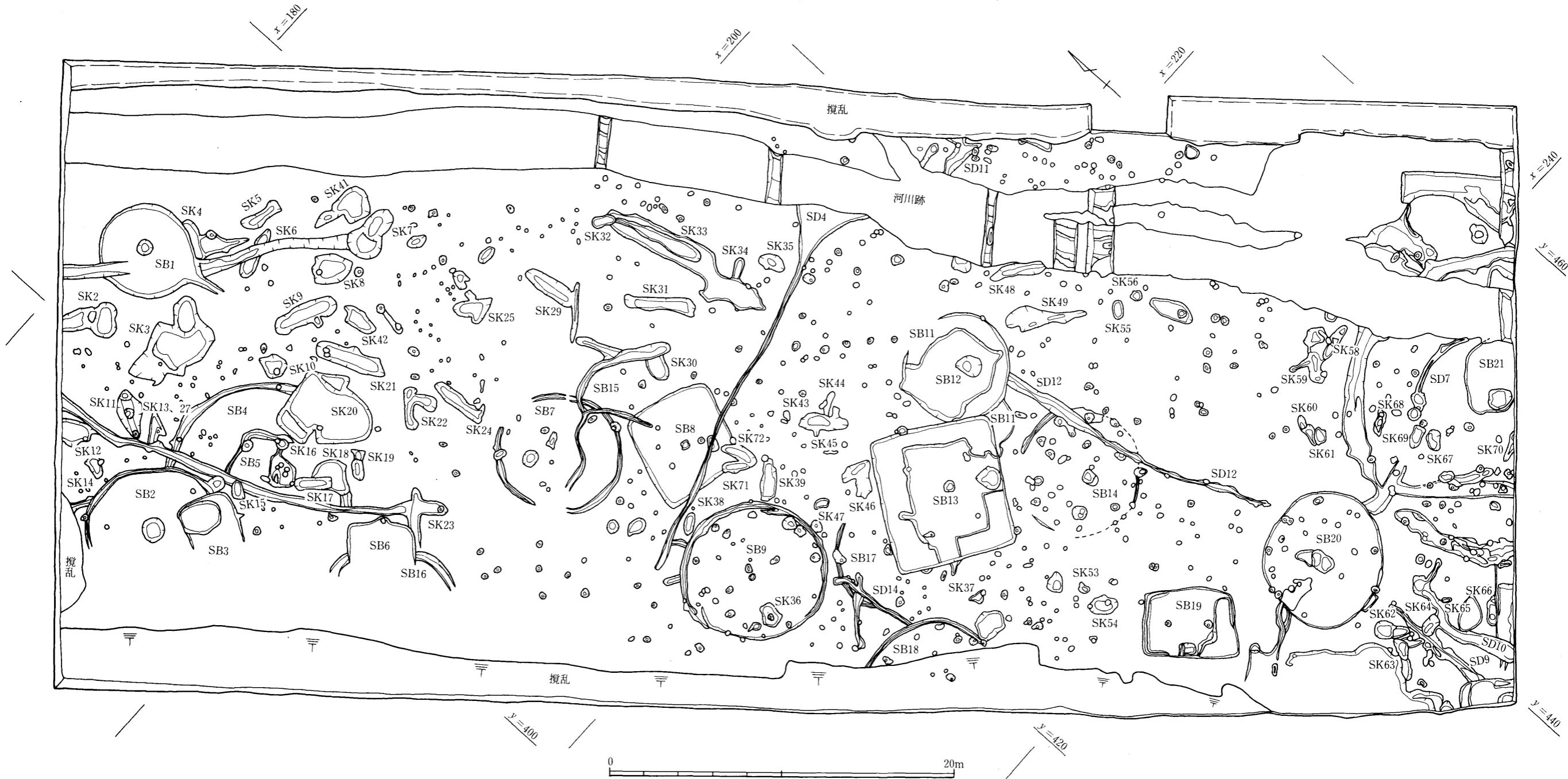


Fig. 70 遺構配置図

竪穴住居跡

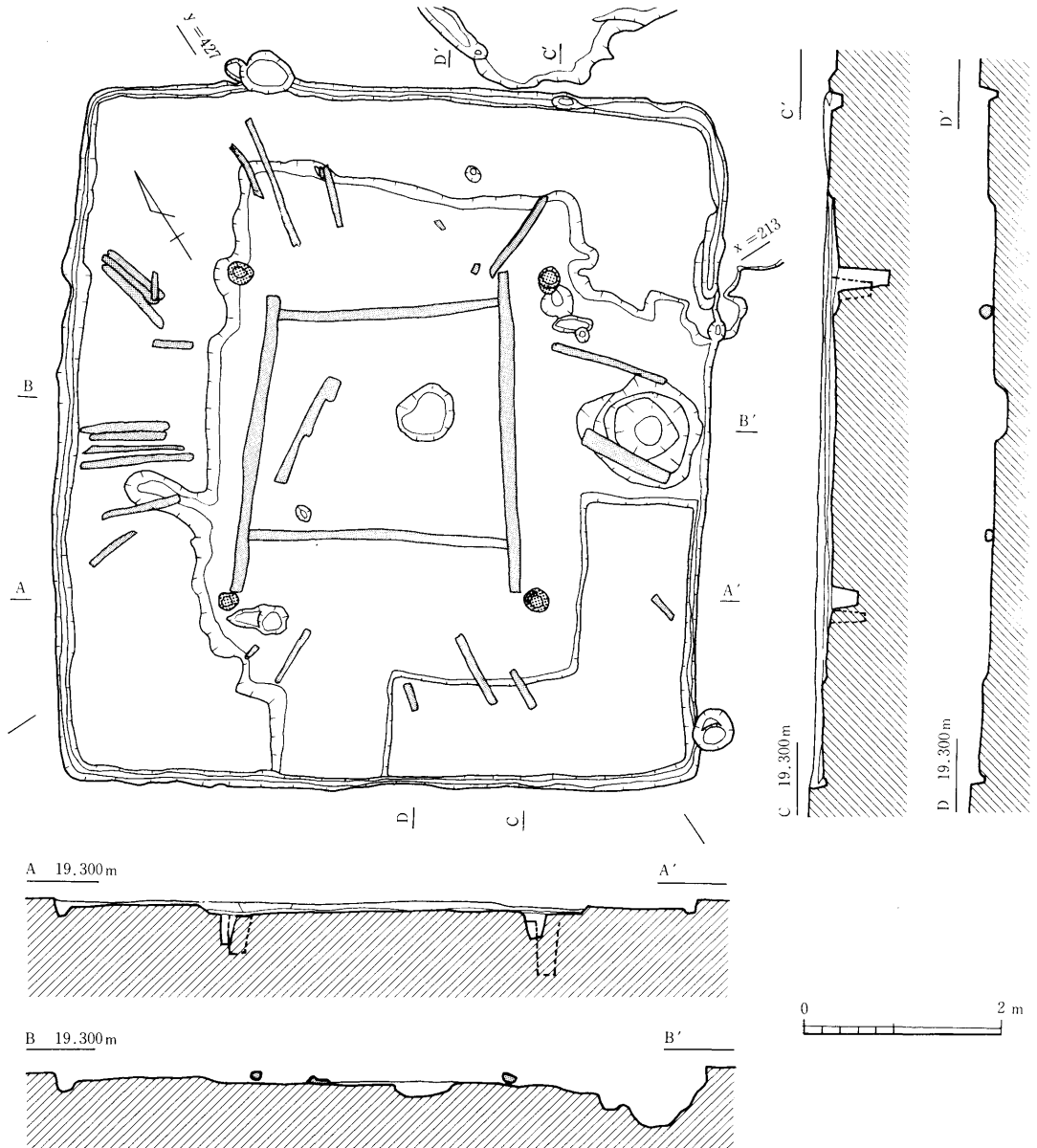


Fig. 71 第13号竪穴住居跡実測図

すぎないものも存在しており、ここでは残存状態が比較的良好で、平面形態、規模、主柱配置、内部構造、附属施設などが看取できる、代表的な住居跡について列記する。

第9号竪穴住居跡 (Fig. 69, PL. 43(1))

遺跡保存地区のほぼ中央部に位置する弥生時代中期後半の住居跡。平面形態はやや楕円

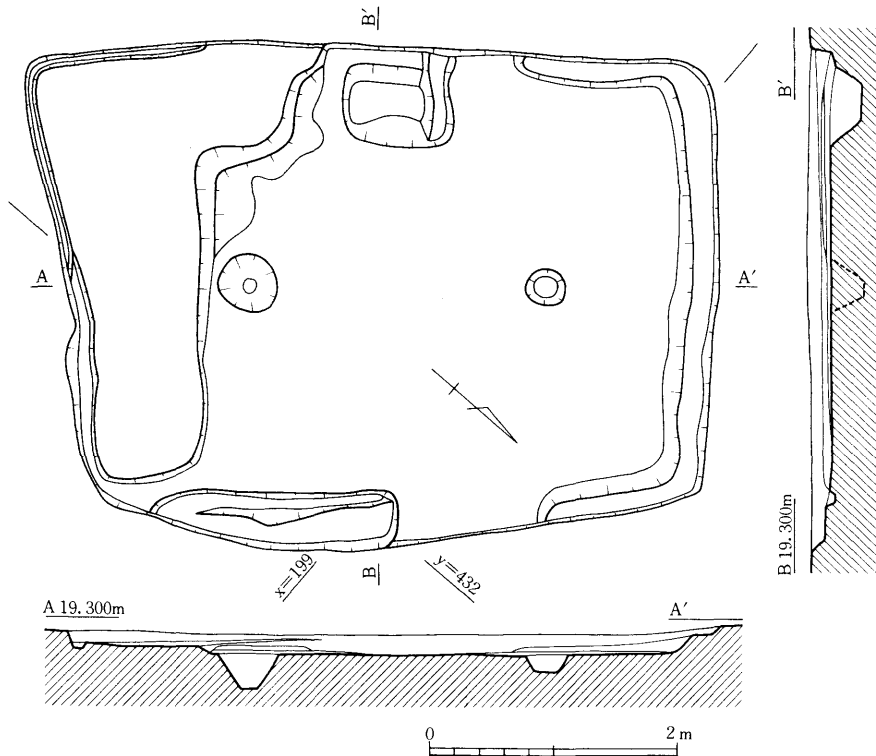


Fig. 72 第19号竪穴住居跡実測図

形状を呈する円形で、上面径約7.8～8.6m、床面積約48.4㎡の規模をもつ。支柱は9本で、約2.3m～3.0m間隔で周壁に極めて近接して配置されている。床面中央部の中央穴を挟んで2ヶ所に支柱穴が認められる。壁溝は南西部を除いて全周に巡るが、住居外への張り出しが存在する西縁の一部では途切れており、出入口が造出された可能性がある。

#### 第13号竪穴住居跡 (Fig. 71, PL. 43(2)・46(1)(2))

遺跡保存地区の中央部よりやや南に位置する古墳時代初頭の住居跡。平面形態は方形で、東西辺約7.6m、北辺約7.1m、南辺約7.1m、床面積53.6㎡の規模をもつ。支柱は4本である。屋内施設として周壁に沿ってベッド状遺構、壁溝が巡るが、ベッド状遺構は東・南両辺の中央部では途切れている。東辺ではこの空間部分に周壁に接して炉跡が営まれており、カマドが出現する前段階の施設と考えられる。また、南辺では幅約1.2mの空間地が造出されており、出入口としての機能が想定される。この住居跡は火災住居で、床面上には桁・梁と思われる径12～15cmの4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で検出された。また、桁・梁の内部の床面上には支柱の一部、また、桁・梁の周囲には極木と推定さ

竪穴住居跡

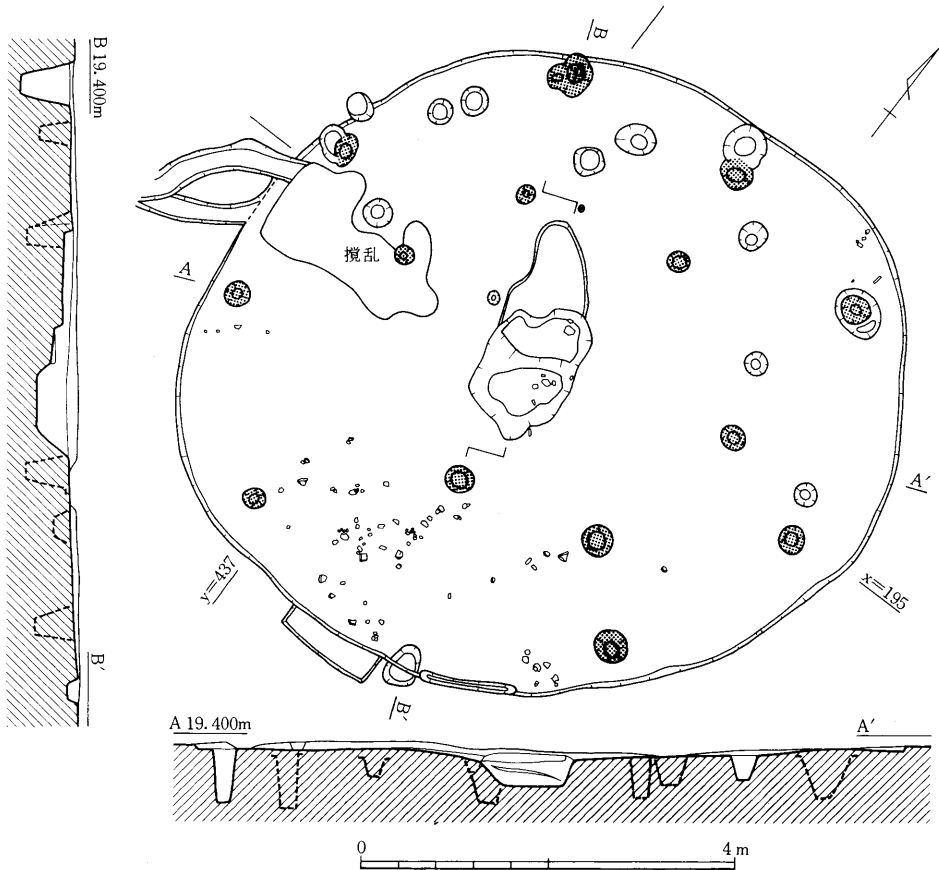


Fig. 73 第20号竪穴住居跡実測図

れる約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に確認されており、寄棟造屋根が想定される。

第19号竪穴住居跡 (Fig. 72, PL. 44(1))

遺跡保存地区の南東部に位置する弥生時代終末の住居跡。平面形態は長方形で、東辺約4.8m、西辺約5.5m、北辺約3.4m、南辺約3.6m、床面積約19.3m<sup>2</sup>の規模をもつ。支柱は長軸に沿って2本が配置される。第13号竪穴住居跡と同様に周壁に沿ってベッド状遺構が巡るが、南北長辺の中央部2ヶ所で途切れており、炉跡およびそれと対峙する位置に出入口と想定される空間地が存在する。

第20号竪穴住居跡 (Fig. 73, PL. 44(2)・46(3)(4))

遺跡保存地区の南東部、第19号竪穴住居跡の東に位置する弥生時代中期前半の住居跡。平面形態はやや楕円形状を呈する円形で、上面径約6.9~7.8m、床面積約43.7m<sup>2</sup>の規模をも

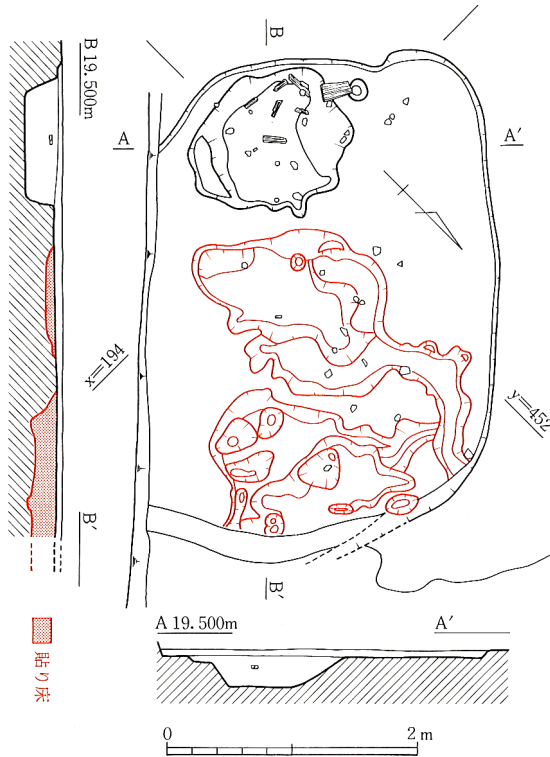


Fig. 74 第21号竪穴住居跡実測図

つ。主柱は8本で、第9号竪穴住居跡と同様に約2.0m～3.0m間隔で周壁に極めて近接して配置されている。また、主柱の内側には同心円状に6本の補助柱が存在する。南縁部には幅約110cm、長さ約20～35cmわたって住居外への階段状の張り出し部分が認められ、出入口と考えられる。壁溝は存在しない。

### 第21号竪穴住居跡

(Fig. 74, PL. 45(1))

遺跡保存地区の南東隅、第20号竪穴住居跡の東に位置する弥生時代中期後半の住居跡。東半部は遺跡保存地区外にあたるため完掘していないが、平面形態は不整形な隅丸形状を呈するものと考えられ、長軸5.3m以上、短軸3.7m以上の規模をもつ。床面は貼り床され、南辺に接し

て柱穴1個が存在するが、床面からの深さが2cmで主柱穴とは考えられず、床面上には主柱穴は存在しない。住居の附属施設として、径約16mの規模で周囲を弧状に巡る溝（第6号溝）や溝と住居の空間地に2基の土壇（第67・69号土壇）が存在する。

### (2) 土壇

土壇は弥生時代中期前半から古墳時代前期の70基を検出した。大半が弥生時代のもので竪穴住居跡に付随すると考えられるが、出土遺物が少なく詳細な時期がわからず、帰属関係は明かにしがたいものが多い。

内訳は弥生時代中期前半～中頃5基、中期後半13基、後期前半5基、後期後半～終末7基で、同時期の土壇が一定範囲内に集中分布する傾向はみられない。平面形態は各時期とも定形化した形態をもたず、不整形な楕円形状を呈するものが通有で、中期後半以降は長楕円形を呈するものが出現する。規模、長軸方向は各時期ともバラエティに富み、基本的に規模の大小による時期差はあまりないが、後期にいたって大形化する傾向にある。各土壇とも機能が終了した段階で、投棄壇として再利用された数基の土壇（第3・9号土壇）

を除いて、機能を推定できる遺物は出土していない。

なお、土壙のうち調査区の南東隅で検出した第67・69号土壙は注目される。

**第67号土壙** (Fig. 75, PL. 47(1))

21号竪穴住居跡の周囲を弧状に巡る溝(第6号溝)の内部に位置し、第69号土壙と並列する。平面形態は不整形な隅丸長方形もしくは楕円形状を呈し、長軸104cm、短軸61cmの規模をもつ。長軸方向は北東-南西である。

**第69号土壙** (Fig. 76, PL. 47(1))

第67号土壙の東約30cmに位置し、第67号土壙と長軸方向を同じくする。平面形態は不整形な隅丸長方形もしくは楕円形状を呈し、長軸127cm、短軸61cmの規模をもつ。検出地点、時期、配列状況、規模などから、第67号土壙と2基一対で第21号竪穴住居跡に付設する土壙と考えられる。

(3) 溝

溝は14条検出した。残存状態が極めて悪く、出土遺物がないものが多いが、時期の明かな溝の内訳は弥生時代中期後半5条、後期終末1条、古墳時代初頭2条で、竪穴住居跡や土壙の存在する弥生時代中期前半の溝はない。中期の段階では北-南および北西-南東に流路をもつものが多いが、後期になると東-西に走行する溝も掘削されるようになる。遺跡保

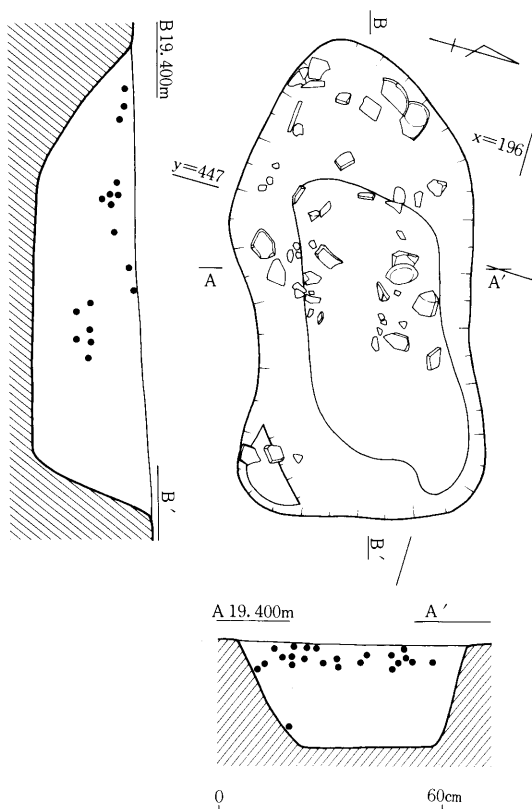


Fig. 75 第67号土壙実測図

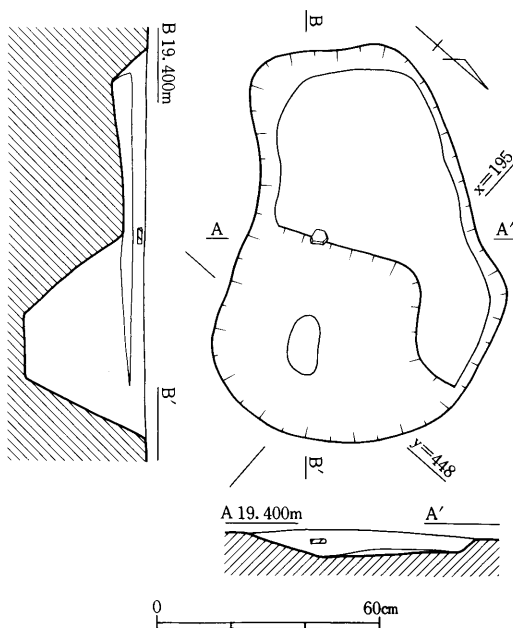


Fig. 76 第69号土壙実測図



山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）

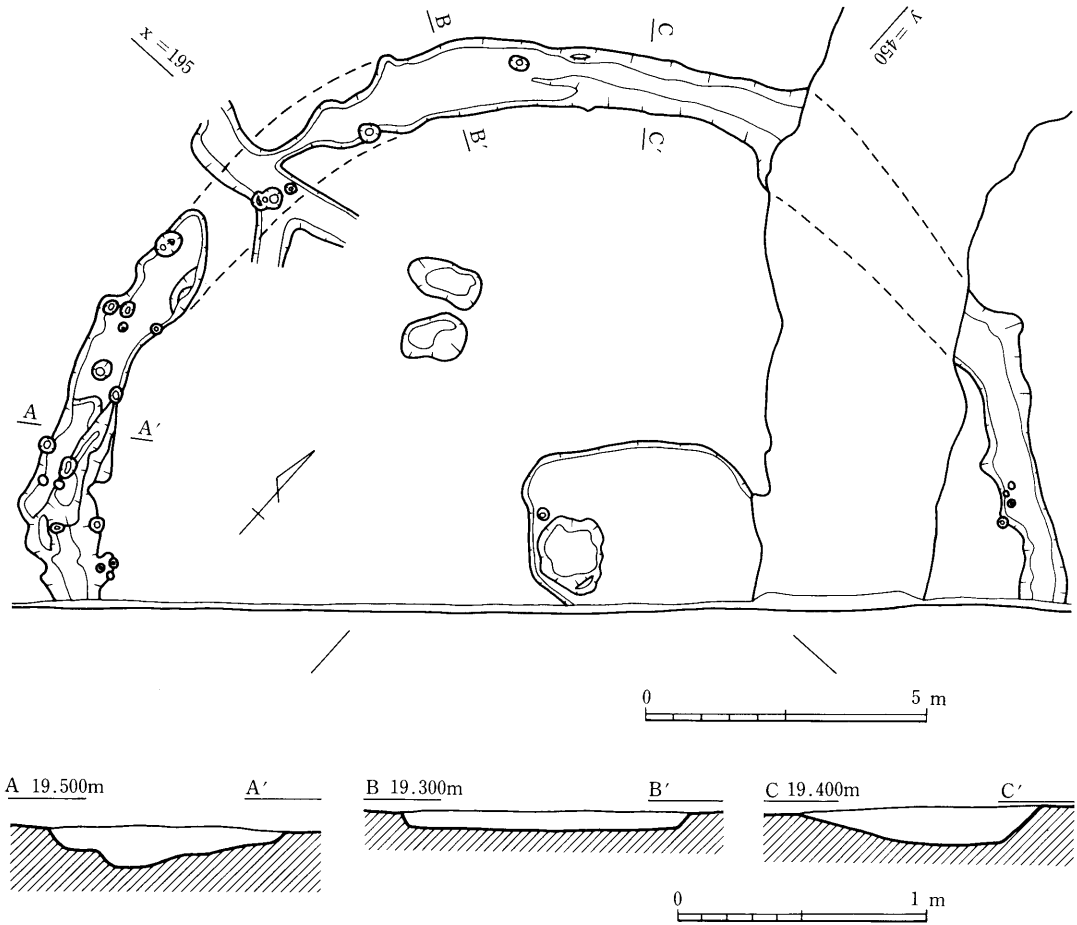


Fig. 77 第6号溝実測図

存地区の東縁を走行する、古墳時代後期から奈良時代の河川跡から取水したと考えられる溝は検出していない。

溝のうち、遺跡保存地区の南東隅で検出した第6号溝は特筆される。

**第6号溝 (Fig. 77, PL. 45(2))**

弥生時代中期後半の溝で、東への延長部分は調査区外にあたるため完掘していないが、内径約16~17m、外径約18m、上面幅約100~120cmの規模をもち、21号竪穴住居跡の周囲を弧状に巡っている。住居と溝の内縁との距離は、西辺から約7.6m、北辺から約5.9m、東辺から約4.6mで、住居は円形に区画された空間の中央部からやや西寄りに位置する。弥生時代の集落における同時併存の住居間には、最低20m前後の距離が必要であると想定されており、<sup>4)</sup>住居と溝との空間地に同時期の他の住居の併存は考えられない。また、この空間地

には住居に付設すると考えられる2基の土壌が並列して存在しており、この溝で区画された約250m<sup>2</sup>のエリアが、遺跡保存地区でみられる弥生時代中期後半の集落における一軒あたりの住居の占有面積と考えられる。

(4) 河川跡 (PL. 47(2))

遺跡保存地区の東縁を南東から北西に走行する。古墳時代後期から奈良時代にかけて機能した河川跡で、南半部では2条に分流するが、中央部付近では1本の河川となる。検出長は約90mで、上面幅は平均約2~3m、南東部では最大約10mの規模をもつ。埋積土は上層が砂質土

および粘質土であるが、底面付近では径3~4cm前後の河床底礫が厚さ約40~50cmにわたって堆積しており、古墳時代後期のある時期に小規模な洪水が起こったことを示唆している。同時期の遺構は、遺跡保存地区およびその周辺の地域でも検出されておらず、河川跡をめぐる水利関係の追求は今後の残された課題である。

(5) 土器溜り (PL. 47(3))

遺跡保存地区の南東隅に位置し、河川跡のトレンチで検出した。第6号溝に近接して存在し、弥生時代中期後半の遺物が比較的多量に出土した。規模は未確認であるが、底面には不整形な落ち込みが連続する。祭祀に使用されたと考えられる遺物は含まれておらず、窪地状の自然地形に周辺から遺物が流入したものと思われる。

(6) その他の遺構 (Fig. 78, PL. 47(3))

遺跡保存地区の中央部からやや東で検出した、弥生時代前期末の甕一個体分が集積した掘り込みがある。他の遺構と検出面は同じであるが、それに伴う遺構の掘り方が見あたらず、性格がよくわからない。甕の出土範囲は東西約65cm、南北約80cm、検出面から18cm下位までに集中分布する。出土した甕は口径40.3cm、器高43.3cmの大形のもので、如意形に短く外反する口縁部の下端にヘラによる刻目を施し、頸部に断面三角形の貼付突帯が1条巡る。内外面とも刷毛目仕上げされる。

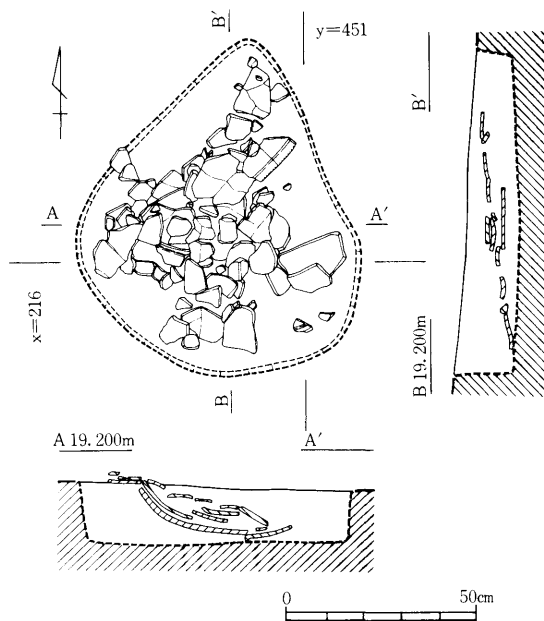


Fig. 78 性格不明の遺物出土状況実測図

弥生時代前期に遡る遺構は遺跡保存地区では検出していないが、野球場の南東縁付近では当該期の竪穴住居跡や遺物包含層が検出されており、前期の集落が野球場から遺跡保存地区にかけての一带に存在していることが明かとなった。

### 3 遺物

出土遺物のうち、注目しておきたいものが若干ある。

まず、弥生時代中期後半の第9号竪穴住居跡の埋積土から出土したナイフ形石器があげられる。原位置から遊離した資料であるが、対向する打面をもつ石核から剥離された縦長剥片を素材として作出された一側縁加工のナイフ形石器である。メノウ製で、先端部を若干欠損するが、現存長4.2cm、最大幅1.9cm、最大厚0.7cm、重量6.2gである。山口盆地内では旧石器の出土例は極めて少なく、また、共伴する石器もないため詳しい時期はわからないが、当資料が比較的大形の部類に属するナイフ形石器であることから、時期的にやや遡る要素をもつ。弥生時代以降の遺構の検出面を形成する黄褐色粘質土が、縄文時代晩期中頃から後半の遺物包含層であることは、すでに教養部複合棟敷地や教育学部附属教育実践研究指導センター敷地<sup>6)</sup>で確認されており、遺跡保存地区でも縄文土器が遺構の検出面に貼り付いた状態で出土している。出土したナイフ形石器は、出土状況から住居掘削時に旧石器時代の遺物包含層から遊離した可能性があり、黄褐色粘質土が分層され、旧石器および縄文時代の二時期の遺物包含層を構成する堆積層であることが想定される。

次に、下城式系統の甕があげられる。典型的な下城式の甕ではないが、第20号竪穴住居跡や第69号土壙から出土した。第20号竪穴住居跡からは、口縁端部を上下両方あるいは下方にややつまみ出し、狭い口縁端部外面にヘラによる鋸歯文を刻む壺や口縁部の未発達な鋤先状口縁をもつ須玖I式でも古い要素をもつ壺が伴出している。前者は、中期後半に周防部に通有な口縁部が下垂する壺の祖形で、中期前半でも古い時期のものである。この段階で上方への突出度の小さい跳ね上げ口縁をもつ甕も出現している。下城式の甕は、吉田構内の南西約2.8kmに所在する山口市西遺跡<sup>7)</sup>、および内陸部の阿武郡阿東町突抜遺跡<sup>8)</sup>で中期初頭のものが、防府市大崎遺跡<sup>9)</sup>で中期後半のものが出土しており、周防部では中期全般を通じて断続的に東九州の文化が流入したと考えられる。

また、山陰系文化の伝播もみられる。第3号土壙からは短くゆるやかに外反する口縁部をもち、肥厚させた端部外面にヘラによる凹線を刻む弥生時代後期前半の甕や第13・19号竪穴住居跡などからはいわゆる複合口縁をもつ弥生時代終末の山陰系の甕が出土している。前者は遺跡保存地区の北西に隣接する教育学部校舎敷地でも同タイプの甕が出土しており<sup>10)</sup>、

後期の段階では確実に、複合口縁をもつ壺に代表される防長独自の文化とともに西部瀬戸内系の文化と山陰系の文化の土器分布圏が形成されていたことを示唆している。

#### 4 集落構造

ここでは、吉田構内を含めた弥生時代から古墳時代にかけての県内の竪穴住居跡について、平面形態・床面積・支柱数・屋内施設などの構造的属性の変遷過程を通観する。

##### （1）弥生時代

遺跡保存地区では弥生時代中期前半から後期終末の竪穴住居跡16棟を検出した。内訳は中期前半～中頃3棟、後半5棟、後期後半1棟、終末3棟のほか中期に属すると考えられるもの4棟である。

遺跡保存地区では前期に遡る竪穴住居跡は未検出である。県内では豊浦郡菊川町坂ノ上遺跡<sup>11)</sup>で平面形態が隅丸方形の前期末の住居が検出されている。前期末～中期初頭の西遺跡<sup>12)</sup>突抜遺跡<sup>13)</sup>、および前期後半～末の豊浦郡菊川町上原遺跡<sup>14)</sup>ではこの時期の住居すべてが円形で、中期後半にいたるまで方形の住居がみられないことから、前期末が方形から円形への平面形態変化の第一の画期として位置づけられる。

平面形態は中期中頃まではすべて円形であるが、中期後半になると円形4棟に加え、遺跡保存地区第21号竪穴住居跡のように隅丸方形状を呈するものも出現する。吉田構内教育学部校舎敷地で検出された第1号竪穴住居跡<sup>15)</sup>や山口盆地内の山口市朝田墳墓群第II地区<sup>16)</sup>、同大内氏築山跡<sup>17)</sup>などの県内のこの時期の竪穴住居跡は円形が一般的である。しかし、大崎遺跡<sup>18)</sup>、熊毛郡熊毛町岡山遺跡<sup>19)</sup>、宇部市北迫遺跡<sup>20)</sup>では隅丸方形の住居が出現しており、中期後半が円形から方形への平面形態変化の第二の画期として捉えることができる。しかし、この段階では防府市井上山遺跡<sup>21)</sup>にみられるように方形住居の出現率は極めて低い。

後期前半の住居跡は遺跡保存地区内には存在しないが、後期後半から終末には方形もしくは長方形3棟、円形1棟と円形系統と方形系統の出現率が逆転し、円形のものもわずかながら残存する。このような円形から方形への変化は山口盆地内の朝田墳墓群第II地区、山口市堂道遺跡<sup>22)</sup>でうかがえるような平面形態変化の流れに連動している。なお、後期後半には突抜遺跡DW15<sup>23)</sup>、防府市右田一丁田遺跡<sup>24)</sup>の第3・6・20号住居跡のように一辺が胴張りになる隅丸方形の住居や、突抜遺跡DW11<sup>25)</sup>、下松市宮原遺跡<sup>26)</sup>の第1号住居跡のように上面が円形で床面を方形に掘り下げる、円形から方形への過渡的な形態をもつものも存在する。このような折衷形態の住居は内陸部に顕著にみられ、比較的ルーズな形態変化をたどることができる。しかし、長門部の下関市伊倉遺跡<sup>27)</sup>、同石原遺跡<sup>28)</sup>では、後期後半～終末に

は先進的にすでにすべて方形へと変化しており、内陸部の様相とは対照的である。

では、このような平面形態の変化は床面積・内部施設などの変化とどのような相関関係をもつのであろうか。

床面積は中期前半～中頃には、遺跡保存地区第10号竪穴住居跡のように約10㎡前後の規模をもつ住居とともに、約43㎡（遺跡保存地区第20号竪穴住居跡）、50㎡以上（遺跡保存地区第4号竪穴住居跡）の規模をもつ大形の住居が存在している。中期後半になっても平面形態が円形の住居の場合、住居規模には20㎡前後のもの（遺跡保存地区第1号竪穴住居跡）と50㎡前後の（遺跡保存地区第2・9号竪穴住居跡）の大きく大小2群の住居が存在し、大形住居が主体を占める傾向がある。しかし、中期後半までが朝田墳墓群第II地区の第5・6号竪穴住居跡<sup>29)</sup>、大崎遺跡S B 5<sup>30)</sup>、井上山遺跡の第9号竪穴住居跡<sup>31)</sup>などにみられるように大形化のピークと考えられる。それ以後、山口盆地内では後期終末までに大形化は収束し、床面積は方形住居で朝田墳墓群第II地区の第11号竪穴住居跡<sup>32)</sup>、西遺跡の第16号竪穴住居跡<sup>33)</sup>などの約10～20㎡のもの、円形住居で朝田墳墓群第II地区の第10号竪穴住居跡<sup>34)</sup>、西遺跡の第10号竪穴住居跡<sup>35)</sup>などの約20～40㎡のものに規模が規格化する。県内では、長門部の方形の平面形態をもつ石原遺跡の第3・4号竪穴住居跡<sup>36)</sup>や円形の平面形態をもつ大津郡日置町高畑遺跡のDW 1・3<sup>37)</sup>、周防部の熊毛郡平生町松尾遺跡の第1・3住居跡<sup>38)</sup>のように、格段に大形化した住居の一群が特徴的に存在する地域を除いた普遍的な傾向である。これらの大形の住居からは高畑遺跡のDW 1、松尾遺跡の第1・3住居跡のように一般の集落構成員ではもちえないガラス小玉が出土しており、集落構成員の主体的な力量関係による住居規模の相違として理解できる。

平面形態と床面積の関係からは、円形住居と方形住居で同一の床面積を確保する場合、円形住居の径は方形住居の辺長よりも計算上約1割長くとる必要がある。このことは、床面積が必ずしも居住人員の容量を規定する絶対的な条件ではないことを示している。すなわち、円形住居が中央部から周壁までが等分の距離に保たれ、かつ、方形住居の辺長よりも約1割長くとられた円形住居の径が、限定された空間を効率的に使用し、収容人員の拡大をはかるための不必要なスペースを解消する手段として採用された結果と考えられる。前期後半～末にかけての方形から円形への平面形態変化の第一の画期は、稲作受容期以後、水田経営を主とした生産基盤の安定化がもたらしたゆるやかな人工増加がその要因のひとつとしてあげられないであろうか。中期後半における円形住居の大形化は、都出比呂志氏<sup>39)</sup>が述べるように、「倭国大乱」の緊張時に戦闘に備えて集住を余儀なくされた結果、一棟ご

との収容面積の大幅な拡大を伴い、円形住居の盛行を招いたものと理解できよう。

中期後半以降の平面形態が円形から方形へと変化する第二の画期は、住居構造とりわけ上屋構造の変化がもたらしたものと考えられる。具体例をあげると、中期後半の大崎遺跡 S B 2<sup>40)</sup> は平面形態が隅丸方形で、床面中央部の中央穴を挟んで対峙する小規模な2個の柱穴が検出されている。また、西遺跡でも同様な平面形態をもち、床面中央部付近に支柱穴とは考えられない小規模な2個の柱穴が存在する。これらは棟持柱を立てるため柱穴と考えられ、前代の支柱のみで上屋を支える構造から変化し、同時に屋根を高く保つ住居構造へと転換したものと理解される。

支柱は円形住居の場合、基本的には住居規模に応じた本数が配置され、床面積約40m<sup>2</sup>以下で4～6本、それ以上の規模をもつ住居では7～9本が通例である。方形住居の場合は、中期後半以降、床面積の規格化が進み、大半が2本もしくは4本が配置される。支柱の本数、配置場所は居住空間の利用形態に少なからぬ意識が反映していたと考えられ、以下では支柱に囲繞された床面空間とそれ以外の床面空間の分化のありかたについて検討する。

円形住居の場合、弥生時代全般を通じて約30m<sup>2</sup>以下の床面積をもつ住居は、支柱間に囲繞された床面積は全床面積の45%ないしはそれ以下のものが大半で、4～5本の支柱をもつ中期後半の防府市奥正権寺遺跡<sup>41)</sup>、右田・一丁田遺跡、井上山遺跡などの竪穴住居跡において顕著にみられる。しかし、35%以上の床面積をもつ住居では、7～9本におよぶ支柱の増加とあいまってこの割合が45%を超え、後期終末の宮原遺跡の第7号住居跡<sup>42)</sup>では79%にも達し、支柱がより周壁近くに配置されたことを示している。

方形住居の場合、後期の資料に限られるが、床面積はすべて35m<sup>2</sup>以下で、支柱間に囲繞された床面積は全床面積の20～40%が一般的である。なお、円形住居のうち、中期～後期にかけては支柱間に囲繞された床面積は、突抜遺跡 DW 8・19<sup>43)</sup>などの約35m<sup>2</sup>前後のもの、西遺跡第14号竪穴住居跡<sup>44)</sup>や宇部市北迫遺跡のB地区第II区第1号住居跡<sup>45)</sup>などの約20m<sup>2</sup>前後のものがあり、方形住居のうちの大形・小形の各グループの床面積に対応している。したがって、大形の円形住居の支柱間に囲繞された床面積は、方形住居の全床面積に対応していることになり、円形住居においては方形住居では確保できない空間利用の方法が採用されている。

屋内施設のうち、ベッド状遺構は北迫遺跡のB地区第II区第2号住居跡<sup>46)</sup>では中期後半にすでに出現しているが、ベッド状遺構が先進的に造出される北部九州でも中期後半以降であり、極めて異例である。県内では石原遺跡のB地区第1号住居跡<sup>47)</sup>、遺跡保存地区の第13・

19号竪穴住居跡、玖珂郡玖珂町清水遺跡の第2・5号住居跡<sup>48)</sup>、熊毛郡熊毛町迫迫遺跡の第22号竪穴住居跡<sup>49)</sup>などにみられるように、平面形態が方形へと変化する後期後半～終末にかけて一般化する屋内施設である。

また、竪穴住居の出入口の造出方法は資料数が少ないため、時期的な特徴、変遷過程は抽出できないが、出入口としての施設を積極的に作り出すものと他の屋内施設と配置関係によって出入口を設けるものとの大きく2手法に区分されると考えられる。前者には、中期前半の遺跡保存地区の第20号竪穴住居跡、中期後半の同教育学部校舎敷地の第1号竪穴住居跡、吉敷郡阿知須町青畑遺跡<sup>50)</sup>、後期前半の西遺跡第16号住居跡にみられるように、周壁の一部に住居外への階段状の張り出しを設ける例と、中期前半の朝田墳墓群第II地区の第5号竪穴住居跡、後期終末の突抜遺跡DW15のように周壁の一部に住居内に張り出す平坦面を有する例の2タイプがある。後者には、中期後半の遺跡保存地区第9号竪穴住居跡、後期終末の同19号竪穴住居跡、豊浦郡菊川町下七見遺跡の第2地区S B 1<sup>51)</sup>、清水遺跡第6号住居跡<sup>52)</sup>のように、全周に巡る壁溝を出入口を設ける位置で一部分途切れさせ、その部分の床面には支柱を配置しない場合がある。その他の場合は、炉の位置、風向、住居の立地、集落内での位置関係などによって出入口の位置が決定されたと考えられる。

## （2）古墳時代

遺跡保存地区では古墳時代初頭の第12・13号竪穴住居跡の2基があり、また、吉田構内ではキャンパスの中央部に位置する、第二学生食堂敷地からは同時期の5基の住居跡の検出例<sup>53)</sup>がある。平面形態はすべて方形で、床面積は約50m<sup>2</sup>の規模をもつ遺跡保存地区第13号竪穴住居跡を除いて約10～30m<sup>2</sup>の範囲内におさまる。支柱は2本のもの<sup>54)</sup>と4本のものがある。4世紀代の住居跡は、平面形態方形の下関市秋根遺跡L S 004、山口市下東遺跡K P D - 1<sup>55)</sup>など比較的少なく、いまだ資料不足である。平面形態は5世紀以降、県内の竪穴住居跡はすべて方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の方形系統の住居で占められ、4世紀代、遅くとも5世紀には円形から方形への画一的な平面形態変化の画期が認められる。では、方形系統4種の住居は古墳時代を通じてどのような出現、占有率を占めているのだろうか。県内の101の竪穴住居跡を分析すると、方形住居は弥生時代終末～3世紀代では、全住居の約44%、5世紀代で約45%と方形系統の住居の半数に満たず、出現率はほぼ同じである。しかし、6世紀代では全住居の約57%、7世紀代で約67%と全住居の約7割を占めるようになる。また、隅丸方形住居は弥生時代終末～3世紀代では、全住居の約34%であるが、5世紀代には出現頻度が急増し、55%を占めるようになるが、その後、6世紀代では

全住居の約36%、7世紀代で約33%と安定した採用率を示すようになるとともに棟数が減少する。すなわち、弥生時代終末～3世紀には方形住居が隅丸方形住居よりも棟数的に優位を占めていたが、5世紀代には両者の出現頻度が逆転し、それとともに次第に、長方形、隅丸長方形の住居が減少する。しかし、6世紀代を境に再び方形住居が集落内での棟数を増し、7世紀代では全住居の約7割を占めるようになり、隅丸方形住居を圧倒的に凌駕する。上記のように、古墳時代の住居の平面形態は方形系統のうちでの方形への画一化として理解でき、その時期は5～6世紀代に求めることができる。

床面積は、弥生時代終末～3世紀代では方形系統の住居は、大きく約10～30㎡、約35～40㎡、50～60㎡の3群に区分されるが、約10～30㎡の規模のものが多く、伊倉遺跡、秋根遺跡、石原遺跡などの住居跡に顕著にみられ、この傾向は5世紀代まで存続する。しかし、6世紀代ではいっそう顕著となり、遺跡保存地区第13号竪穴住居跡や5世紀代の右田・一丁田遺跡の第2・19号住居跡のような35㎡をこえる床面積をもつ住居は姿を消し、床面積はすべて約10～30㎡の規模に縮小してしまう。この時期に縮小化した住居はさらに床面積が約10～15㎡のものと同約20～30㎡のもの二群に分化している。特に、7世紀代では美祢郡秋芳町中村遺跡<sup>56)</sup>、山口市毛割遺跡<sup>57)</sup>の住居のように、約10～15㎡の極めて画一化した床面積をもつ一群が出現する。このように古墳時代における床面積変化の画期は、住居規模の小形化・画一化として捉えられ、その時期は平面形態が隅丸方形から方形へと変化し、画一化する6世紀代にあたる。

主柱数は方形系統の住居が定着した弥生時代終末～3世紀代から6世紀代までは基本的に、0、2、4本の三種に限定される。しかし、5世紀代までは4本柱と他の主柱数をもつ住居がほぼ同数に近いが、6世紀代では2本柱が激減し、4本柱を配置する住居が他の主柱数をもつ住居に比べて約2倍近い出現率を示している。主柱数においても6世紀代がひとつの画期にあたる。

主柱間に囲繞された床面積の全床面積に占める割合変化の画期は5、7世紀代に求められる。弥生時代終末～4世紀代では17～41%の範囲内に分散しているが、5世紀代には遺跡保存地区の第13号竪穴住居跡、西遺跡第4・12号住居跡<sup>58)</sup>、下右田遺跡DW-2<sup>59)</sup>などで22～26%、6世紀代では秋根遺跡第3～6号住居跡<sup>60)</sup>、中村遺跡DW-20<sup>61)</sup>、下東KPD-7<sup>62)</sup>などで21～31%で、床面上で一定の割合の空間を占めるようになる。5世紀代では前代にみられた分散傾向が収束し、ほぼ一定の占有率をもつようになり、住居内の空間分割意識が固定化したものと考えられる。この傾向は6世紀代まで続くが、7世紀代では秋根遺跡



L S<sup>63)</sup>014、中村遺跡DW-17・23・30、毛割遺跡第8～10号住居跡<sup>64)</sup>などのように17～42%のバラエティのある占有率をもつ住居が出現する。住居規模の拡大と支柱間に囲繞された床面積の全床面積に占める割合の拡大は必ずしも比例しておらず、各住居単位すなわち集落の構成単位で独自に支柱間に囲繞された床面積の全床面積の選択行為が行われたものと考えられる。

以上のように、古墳時代における住居の平面形態・床面積・支柱数の変化は画一化・規格化現象として把握でき、その画期の時期は6世紀代に認められることが明かとなった。こうした変化をもたらした社会的要因のひとつには、時期を同じくして県内各地で造営された群集墳の盛行の背後にある被葬者の質的变化があげられよう。群集墳は規模・構造とも多様で家族墓的色彩が強く、造営母体は住居数棟でひとつのまとまりをもつ「世帯共同体」と理解できる。福岡県行橋市竹並遺跡では、埋葬された人骨数、年齢、性別などから横穴墓の被葬者の性格は5世紀段階では特定の人に限定されていたが、6世紀段階になると「一横穴墓への埋葬は傍系を含む夫婦単位を基調とした小家族で、それがいくつか集まった単位が家父長制的な世帯共同体を作っている」とされている。また、それ以降は、「一横穴墓への埋葬は直系の小家族のみとなり、細分化されてくる」<sup>66)</sup>いう。6世紀代に認められた竪穴住居の各属性の画一化・規格化は、このような細分化された小家族に対応するもので、自立化しつつある家長を紐帯とした小家族単位の新しい世帯共同体原理の反映ではないであろうか。

## 5 おわりに

小稿では、昭和57年度以降、4次にわたって実施した遺跡保存地区の発掘調査の成果を整理し、山口盆地内および県内の弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡の構造的な変遷を概観した。なお、竪穴住居跡の具体的な構造上の属性数値については先の年報で詳述<sup>67)</sup>しており、参照されたい。

遺跡保存地区は調査後埋め戻され、公開・活用は全くなされていないのが現状である。遺跡保存地区のもつ教育・研究資料としての固有な学術的価値を抽出し、歴史を追体験できる新しい付加価値をもった遺跡の公園化など、大学独自の積極的な利用方法を模索する時期にきているのではあるまいか。

最後に、調査にあたって御理解、御尽力を惜しまれなかった関係各位に衷心より御礼を申し上げる所存である。

注

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H-16区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報I』、1982年)。
- 3) a 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。  
b 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。  
c 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和60・61年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1990年)。
- 4) 藤田憲司「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として—」(『考古学研究』、第31巻第2号、考古学研究会、1984年)。
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』、1988年)。
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』、1988年)。
- 7) 山口市教育委員会『西遺跡』(1986年)。
- 8) 山口県教育委員会『よみがえる弥生のムラ—突抜・馬場遺跡』(1985年)。
- 9) 山口県教育委員会「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡II・大崎岡古墳群・大崎遺跡』(1984年)。
- 10) 前掲注2)。
- 11) 山口県教育委員会『坂ノ上遺跡』(1974年)。
- 12) 前掲注7)。
- 13) 前掲注8)。
- 14) 菊川町教育委員会『上原遺跡』(1976年)。
- 15) 前掲注2)。
- 16) 山口県教育委員会編『朝田墳墓群VI』(1983年)。
- 17) 山口市教育委員会『大内氏築山跡IV』(1990年)。
- 18) 前掲注9)。
- 19) 山口県教育委員会編『岡山遺跡』(1987年)。
- 20) 小野忠熙「北迫遺跡」(『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年)。
- 21) 井上山遺跡発掘調査団『井上山』(1979年)。
- 22) 山口県教育委員会「堂道遺跡」(『堂道・五反地遺跡』、1973年)。
- 23) 前掲注8)。
- 24) 山口県教育委員会編『右田・一丁田遺跡』(1973年)。
- 25) 前掲注8)。
- 26) 山口県教育委員会「宮原遺跡」(『宮原遺跡・上広石遺跡』、1973年)。
- 27) 山口県教育委員会『伊倉遺跡』(1973年)。
- 28) 山口県教育委員会「石原遺跡」(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、1973年)。
- 29) 前掲注16)。
- 30) 前掲注9)。

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）

- 31) 前掲注21)。
- 32) 前掲注16)。
- 33) 前掲注7)。
- 34) 前掲注16)。
- 35) 前掲注7)。
- 36) 前掲注28)。
- 37) 山口県教育委員会・(財)山口県教育財団『たかはた』(1986年)。
- 38) 山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」(『西部瀬戸内における弥生文化の研究』、1984年)。
- 39) 都出比呂志「弥生時代の東と西」『日本語・日本文化研究論集』(大阪大学文学部、1984年)。
- 40) 前掲注9)。
- 41) 山口県教育委員会編『奥正権寺遺跡Ⅰ』(1984年)。
- 42) 前掲注26)。
- 43) 前掲注8)。
- 44) 前掲注7)。
- 45) 前掲注20)。
- 46) 前掲注20)。
- 47) 前掲注28)。
- 48) 山口県教育委員会編『清水遺跡』(1989年)。
- 49) 山口県教育委員会編『追迫遺跡』(1988年)。
- 50) 阿知須町教育委員会『青畑遺跡調査概報』(1983年)。
- 51) 菊川町教育委員会『下七見遺跡Ⅰ』(1989年)。
- 52) 前掲注48)。
- 53) 前掲注1)。
- 54) 下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977年)。
- 55) 山口県教育委員会編「下東遺跡」(『下東遺跡・荻峠遺跡』、1975年)。
- 56) 山口県教育委員会・(財)山口県教育財団『中村遺跡』(1987年)。
- 57) 山口市教育委員会『毛割遺跡』(1983年)。
- 58) 前掲注7)。
- 59) a 山口県教育委員会編『下右田遺跡第1・2次調査概報』(1978年)。  
b 山口県教育委員会編『下右田遺跡第3次調査概報』(1979年)。
- 60) 山口県教育委員会「秋根遺跡」(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、1973年)。
- 61) 前掲注56)。
- 62) 前掲注55)。
- 63) 前掲注54)。
- 64) 前掲注56)。
- 65) 前掲注57)。
- 66) 竹並遺跡調査会編『竹並遺跡』(寧楽社、1979年)。
- 67) 前掲注3) a、3) b。

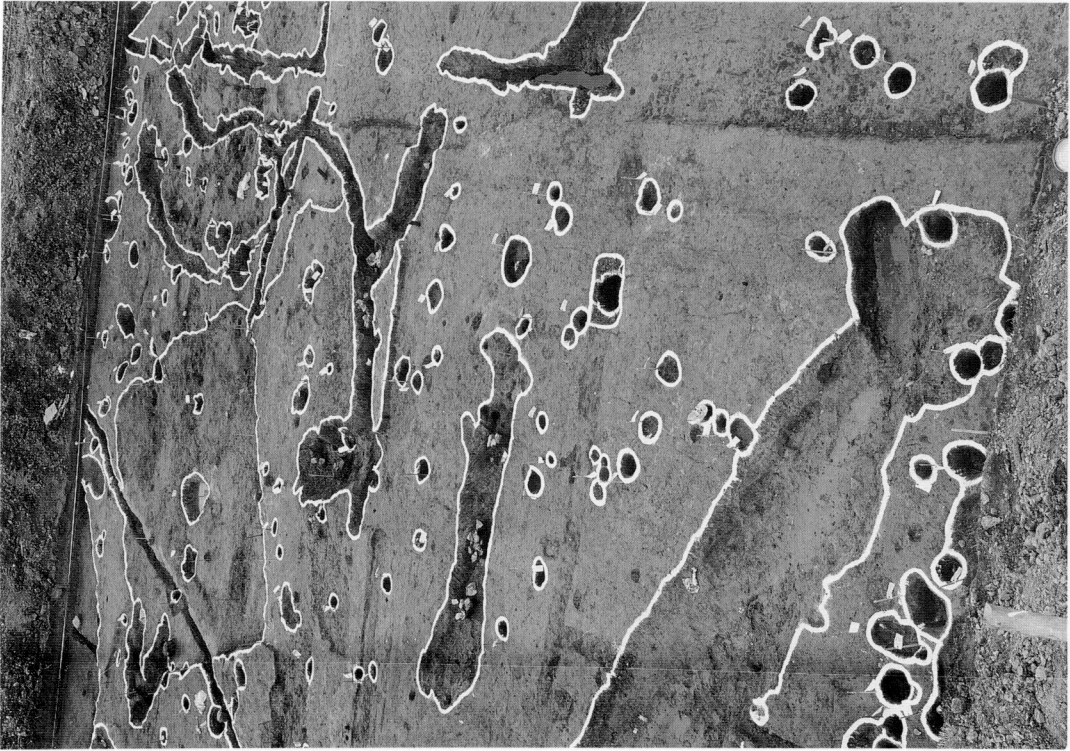
吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）  
(1)



(1) 昭和57年度調査区北端部全景(東から)



(2) 昭和57年度調査区西端部全景(東から)

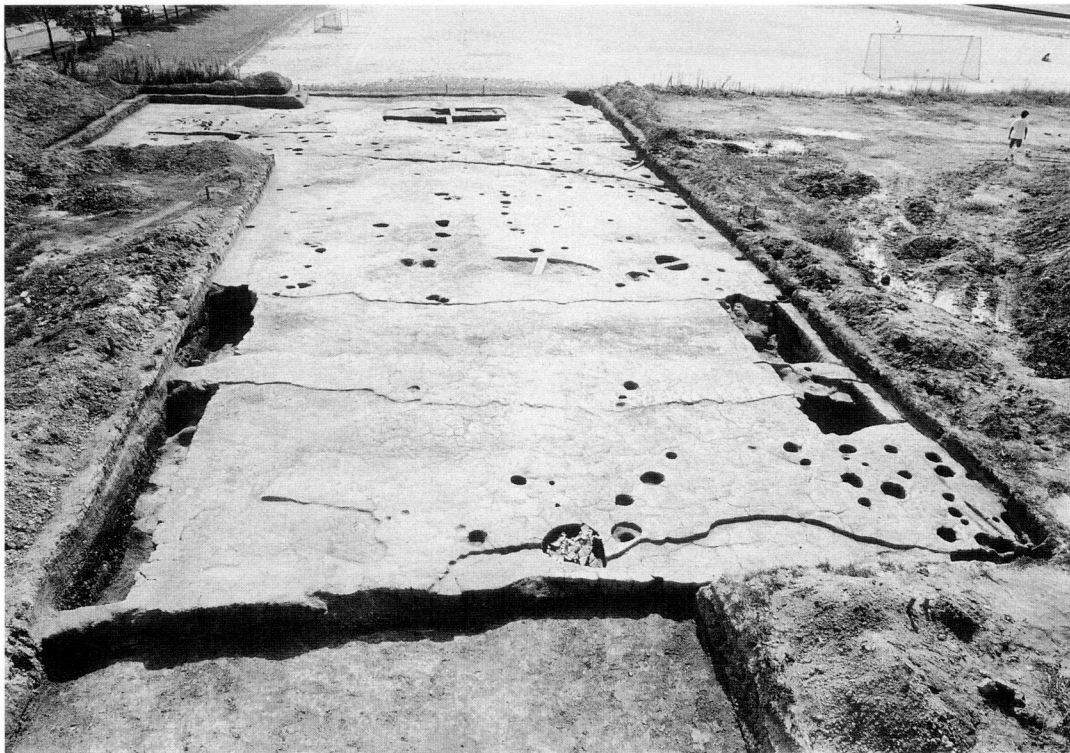


(1) 昭和57年度調査区南端部全景(東から)

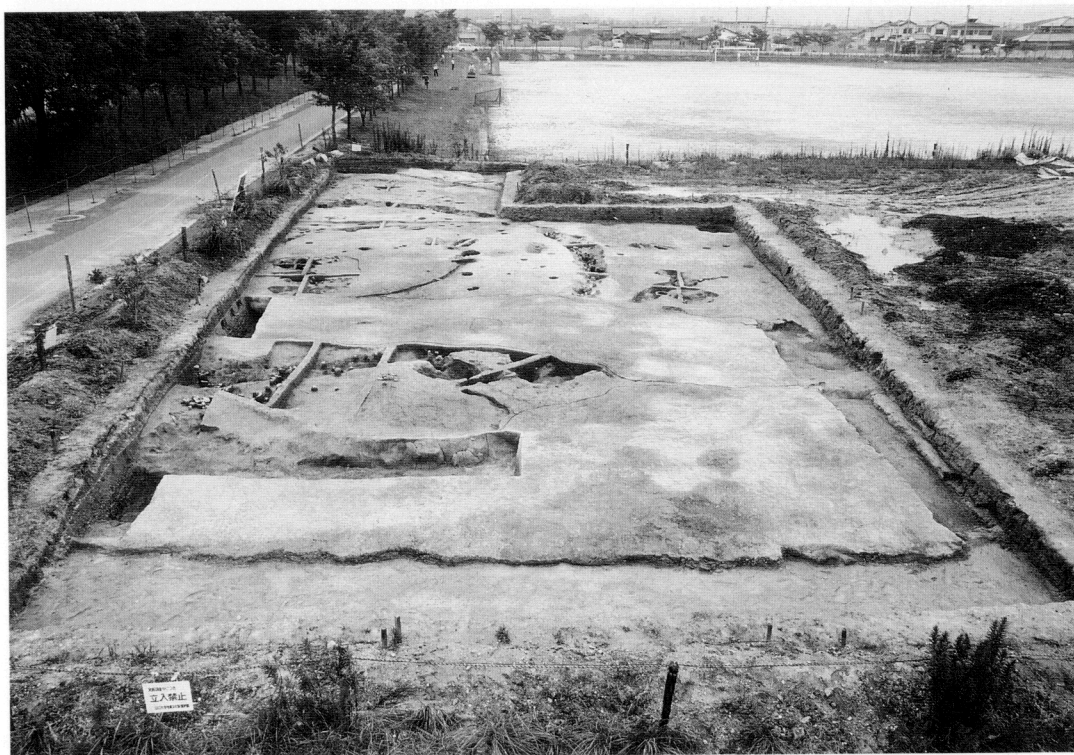


(2) 昭和59年度調査区全景(東から)

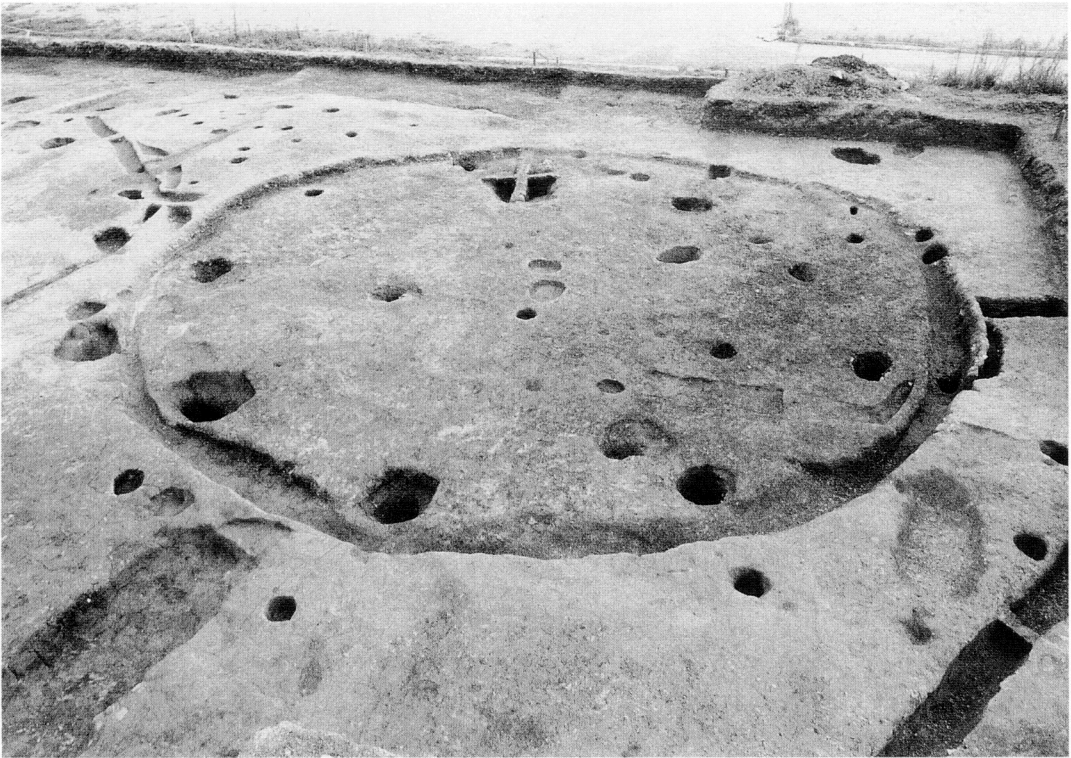
吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）  
(3)



(1) 昭和60年度調査区全景(東から)



(2) 昭和61年度調査区全景(東から)

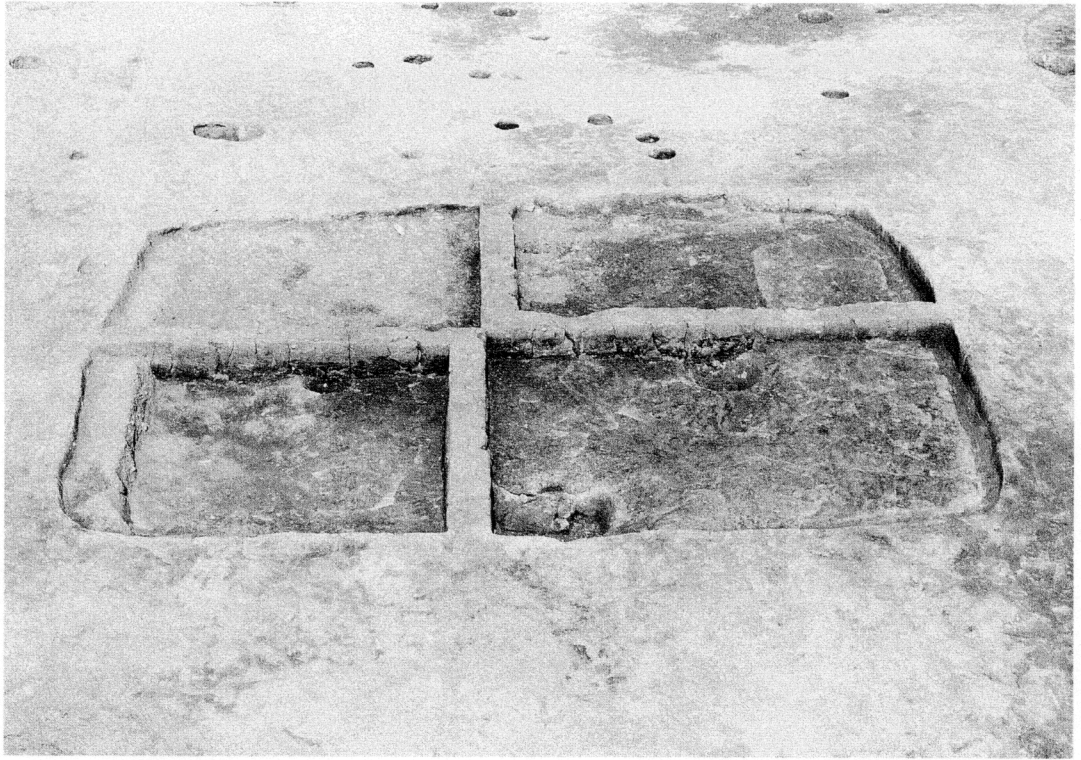


(1) 第9号竪穴住居跡(東から)



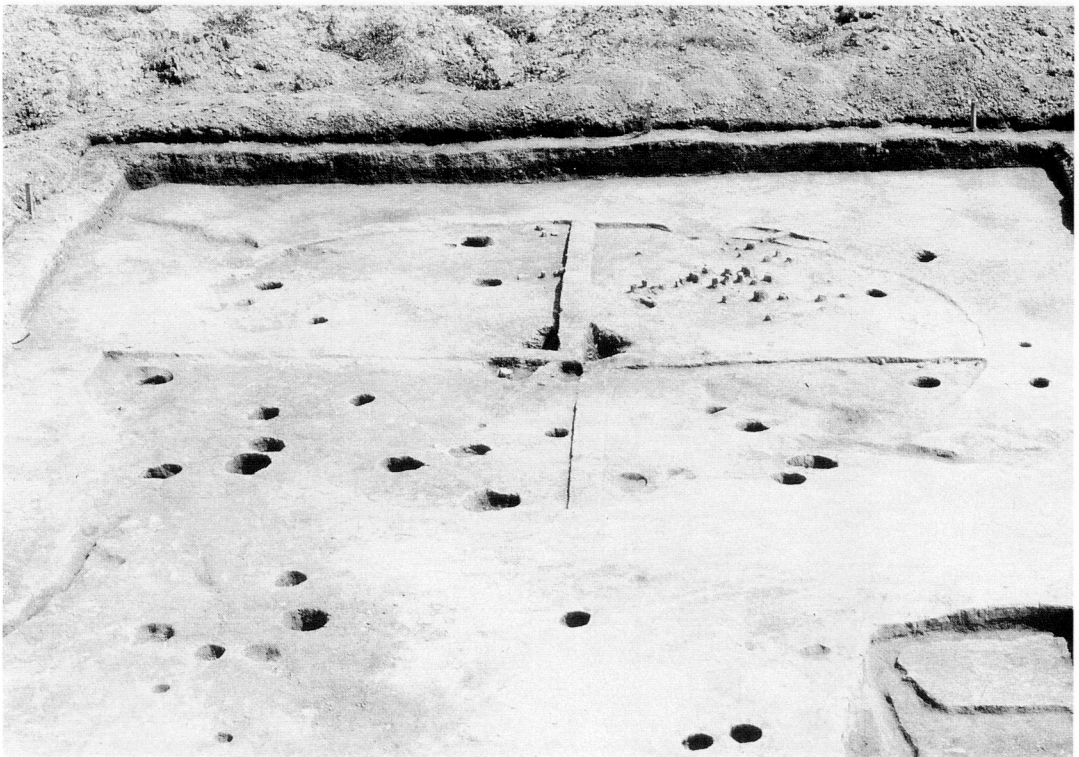
(2) 第13号竪穴住居跡(北西から)

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）  
(5)



(1) 第19号竪穴住居跡(南西から)

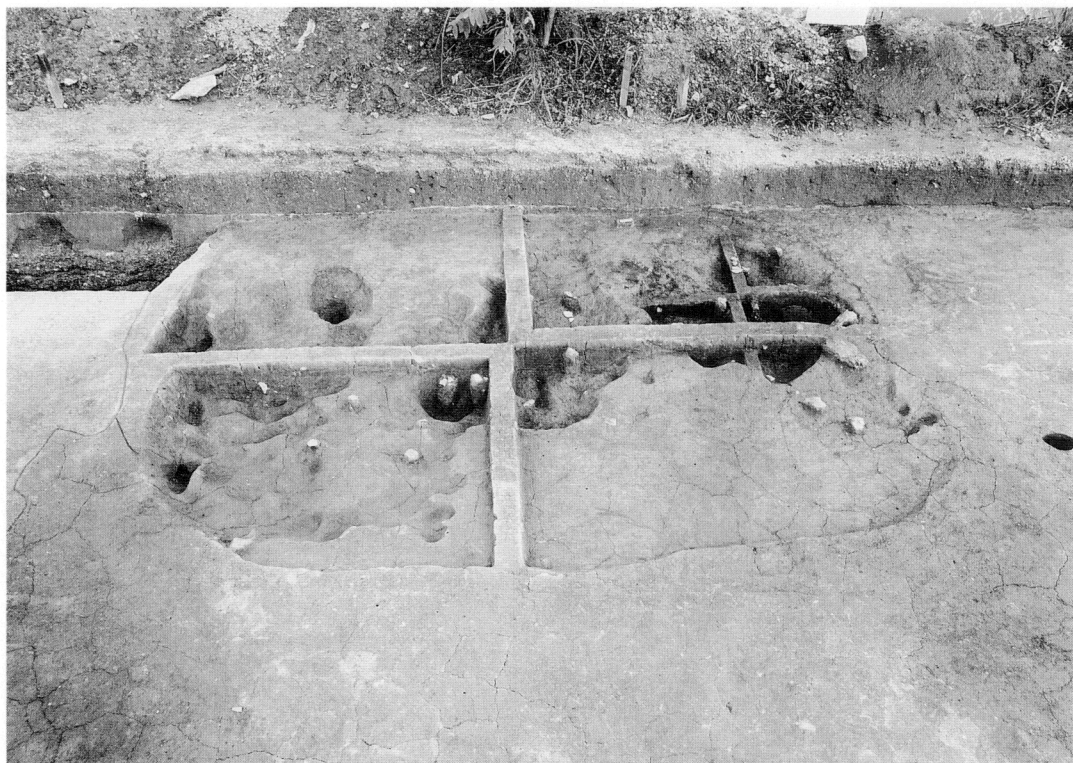
吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）（5）



(2) 第20号竪穴住居跡(北西から)

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）（5）





(1) 第21号竖穴住居跡(北東から)



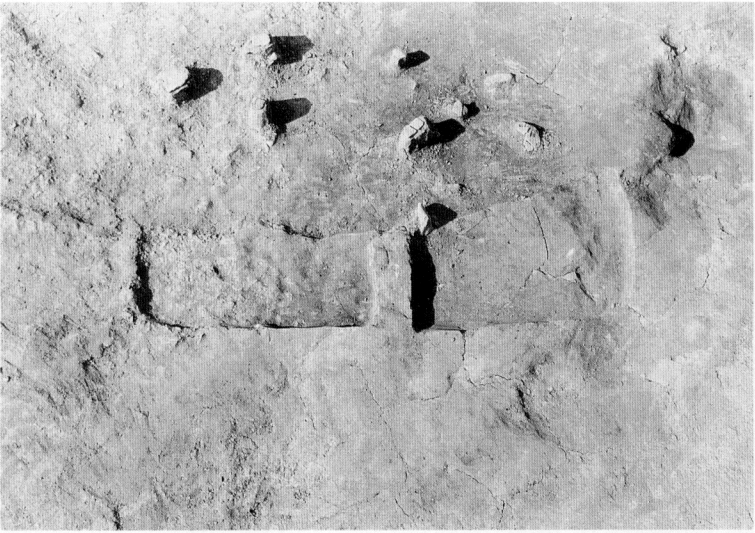
(2) 第21号竖穴住居跡環濠（第6号溝）(北西から)



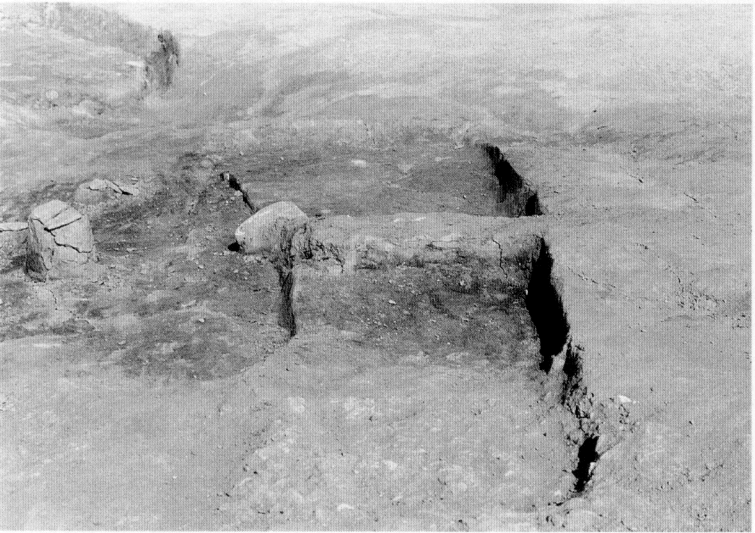
(1) 第13号竪穴住居跡桁材縦断面(南東から)



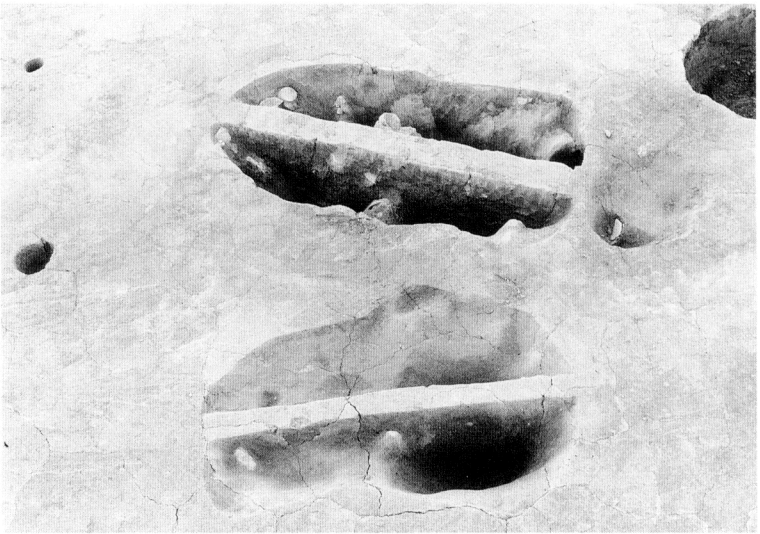
(2) 第13号竪穴住居跡桁材横断面(北東から)



(3) 第20号竪穴住居跡出入口状施設(南から)



(4) 第20号竪穴住居跡出入口状施設(西から)



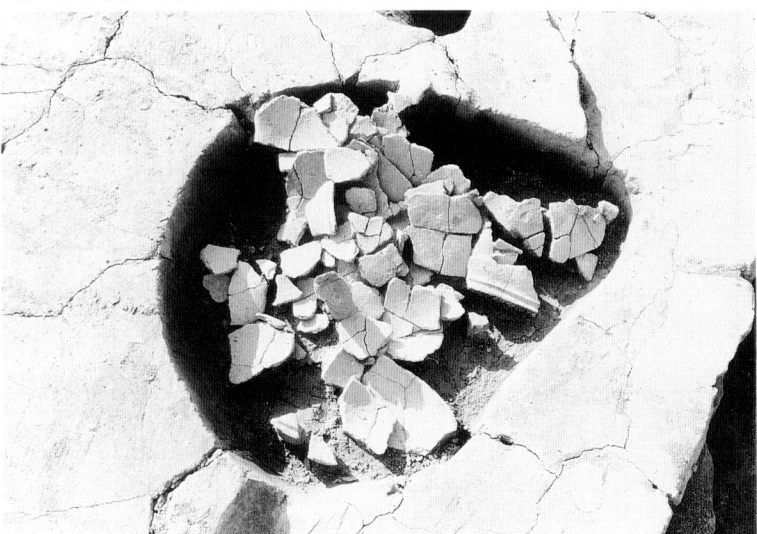
(1) 第67・69号土壇(北東から)



(2) 河川跡土層断面(南東から)



(3) 土器溜り遺物出土状況(西から)



(4) 性格不明の遺物出土状況(東から)